

平和を作り出す者
—平和教育の実践を通して—

奨励	今井 一宏 [いまい・かずひろ]
奨励者紹介	同志社国際中学校・高等学校教頭

平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。

(マタイによる福音書 5章9節)

沖縄への研修旅行

同志社国際中学校・高等学校の今井と申します。今朝は、高等学校で行っている平和教育—沖縄への研修旅行と毎朝の礼拝—を通して、何を生徒に伝えたいと考えているのか、そのことを皆さんと共有したいと思います。

同志社国際高等学校では、2年生の生徒が毎年3月に沖縄に研修旅行に行っています。観光旅行ではなく、平和学習を中心に据えた研修という位置づけです。私たちは開校以来一貫して沖縄への研修旅行を続けており、昨年の春が30回目の沖縄訪問でした。今でこそ沖縄への修学旅行や平和学習はポピュラーなものになっていますが、30年前には飛行機で沖縄に修学旅行に行くような学校はほとんど皆無であり、お手本にするものもなく、私たちは、現地で平和活動をしている方々の助けを借り、手作りで研修旅行を作り上げてきました。

ここで私たちが重視したことは、戦争を五感を通して感じることです。沖縄戦当時、多くの住民たちは、米軍の艦砲射撃から逃れるために、ガマと呼ばれる自然壕に避難していました。いくつかのガマの中では、強制集団死、いわゆる「集団自決」が発生しました。日本軍の部隊が追い詰められてガマにやってきて、兵隊たちが住民たちを追い出したり、住民たちと兵隊たちが入り乱れて生活することになった、そのようなガマもありました。あるガマは野戦病院になり、私たちの生徒たちと同年代の女学生たちが学徒隊として、負傷兵の世話をさせられました。当然、日本軍のいるガマはアメリカ軍の攻撃を受けることになり、多くの住民たちや女学生たちが命を失いました。

研修旅行では、そのようなガマに入って、暗闇の静寂の中で数十年前の状況を追体験します。また、ひめゆり学徒隊として、砲弾が飛び交う中で、多くの級友たちの死を直視しなければならなかった方の証言を聞きます。「集団自決」の場において肉親に手をかけなければならなかった方の証言も聞きます。証言のなかでは、皆さんが「間違った教育」ということを口にされます。「日本は神の国である。この戦争はアジアの人びとを解放するための聖なる戦いである。鬼畜米英に捕まれば、男は惨殺され、女は強姦されてなぶり殺しにされる。生きて辱めを受けるよりは、潔く自らの命を絶つべきである」。証言をしてくださる方々は、戦後ずっと自らの体験を心の奥にしまっておられたのですが、その後、自分の体験を若い人たちに正しく伝えることが、生き残った自分の使命だと考えられて、証言活動をされています。生徒たちはその生々しい証言を聞いて強い衝撃を受け、いまの自分にも置き換えて、戦争の実相を捉えます。最近では、米軍普天間飛行場のすぐ近くの高校と交流も行っています。研修旅行は、その約1年前からいくつかの授業や学年活動のなかで沖縄や沖縄戦のことを学んだ上での実地研修になっています。この研修旅行での体験を通して、学んだ知識を一人ひとりの実体験に昇華させます。心に深く刻みます。これが研修旅行の、平和教育の目的の一つです。

教室で「戦争は悲惨だ」、「平和は大切だ」と学ぶことと、実体験として戦争の実相に触れることは大きく違っています。「平和を愛する」とか「平和を求める」とことと、主体的に「平和を作り出す者」になろうとすることは、全く異なっています。戦争そのものを、戦争の愚かさを、武力による解決ということをしかりと見つめ、考え、心に深く刻み、私たち一人ひとりが「平和を実現する人」、「平和を作り出す者」にならなければならない。これが生徒たちに伝えたいことです。でも「平和を作り出す者」になるとは、どのようなことでしょうか。

村上春樹のスピーチとそれに対する批判

話は変わりますが、昨年の6月、作家の村上春樹がカタルーニャ国際賞を受賞し、スペインのバルセロナで受賞スピーチを行いました。ご存じの方もおられるかと思いますが、そのスピーチは「非現実的な夢想家として」という題がつけられたもので、次のような内容です。

福島第一原発の事故は、日本にとって広島、長崎に続く核の惨事である。広島原発死没者慰霊碑には「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」と刻まれている。私たち日本人は、この言葉を心に刻んで、原子力エネルギーを拒否すべきだった。原子力エネルギーの、安易に効率を優先する考えに導かれるべきではなかった。原発に反対する人々はこれまで「非現実的な夢想家」と呼ばれてきたが、これから私たちは「非現実的な夢想家」として前に進んでいこう。そのように締めくくられています。

このスピーチの全文がインターネットのいくつかのサイトに掲載されていますが、ネット上には、このスピーチを賞賛する声とともに、批判する意見も多く書き込まれています。批判の一つは、広島「過ちは繰返しませぬから」という碑文に対する批判の延長上にあるものです。つまり、日本人は原爆投下の被害者であって、過ちを犯したのはアメリカである。また、反省すべきなのは東京電力や歴代の政府であって、私たちは反省する必要がないという主張です。

しかし、広島原発死没者慰霊碑に書かれた「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」という誓いは、私たち一人ひとりが「平和を作り出す者」にならなければならないという、私たちの考え方と同じ考え方と言えます。また、日本人は原爆投下の被害者であって、過ちを犯したのはアメリカであるという、被害者・加害者という捉え方は、戦争そのものを、武力で解決しようという意識を否定する私たちの立場からは、相容れることはできません。

村上春樹のスピーチに対するもう一つの批判は、核兵器と原発を同列に扱うことに対する異論です。先ほどお話ししたように、村上春樹は、福島原発事故は、日本にとって広島、長崎に続く「被爆体験」だという捉え方をしています。私ははじめてこのスピーチに触れたとき、福島事故が「被爆体験」だという考え方に衝撃を受けました。

日本は戦争の中で原爆の被害を受けた唯一の国であり、自らの実体験として、核に対してノーと言える数少ない国の一つです。一方、日本列島は4つのプレートがぶつかりあう場所に位置し、世界的にもっとも地震が多い地域の一つであり、地質学的にも原発の立地にもっとも不適当な国です。にもかかわらず、国や電力会社による「原発は安全なのだ」という「幻想」を人びとは信じるようになってしまい、気がついたときには、日本の電力の約30%が原子力発電でまかなわれ、日本が世界で3番目に原子炉の多い国になってしまっていた。そのような内容です。

でも、私たちはどうすべきだったのでしょうか。国や県や電力会社が安全だと言うだけでなく、マスコミもそれに同調します。つまり、私たちの周囲すべてが原発を容認するような雰囲気になっているのです。地元では当然反対運動があったのだと思いますが、そこから離れた私たちは、他人事、ひょっとすると地域エゴというふうに捉えていたかもしれません。このようにして、私たちは「間違った方向への流れ」を「普通のこと」として容認してしまっていたのではないのでしょうか。なぜこのようなことになってしまったのでしょうか。その原因の一つは、国民が成熟していなかったからだ、国民が真の意味で自立していなかったからだ、私は思っています。

日常の延長線上に戦争はある

戦争のことに話を戻します。沖縄では、住民たちがいつ命を失ってもおかしくないような極限状態のなかで地上戦が行われました。一方、本土でも空襲に怯えるような状況はあったとは思いますが、そこまでの極限状況ではなかったのかもしれませんが。NHKの朝の連続テレビ小説「カーネーション」では、ちょうど昨年末の放送で戦時中の状況が描かれていましたが、そこでは、多少の不自由はあるものの、日常生活がそれまでとあまり変化したようには描かれていませんでした。その描写に最初は違和感を覚えたのですが、それも現実の戦争の姿なのです。そして、命の危険と隣り合わせの戦闘状態でなく、日常とさほど変わらない状況のなかで、戦争というものが進行していくということに改めて気づかされ、そしてそのことに恐ろしさを感じました。戦争という異常な状況なのに、それを日常の延長線上の「普通のこと」として受け入れていることに、恐ろしさを感じました。

生徒たちには、日常とは異なる戦争の、悲惨さ、理不尽さ、愚かさを伝え、「平和を作り出す者」になることを求めてきました。生徒たちは、戦争という異常な状況は、日常とは別次元のことと考えているかもしれませんが。しかし、日常の延長線上に戦争があるのなら、問われているのは、いま私たちがどうあるべきかということになります。いま身の回りで起こっている出来事を「普通のこと」として無批判に受け入れるのではなく、「異常なこと」かどうかを自ら判断する姿勢と力を持つことこそが重要なのではないのでしょうか。

新島の思いと「平和を作り出す者」

新島襄に、脱国して渡米したいとの熱望に駆り立てさせたものは「ロビンソン・クルーソー物語」と、アメリカの歴史について書かれた「連邦志略」という書物だったと言われています。幕末の封建的な環境のなかで暮らしていた新島にとって、それらの書物に描かれていたアメリカは、これとは全く対照的な自由な国でした。とりわけ、大統領を国民が選挙で選ぶということに、新島は「脳みそが頭からとろけそうになるほど」の衝撃を受けたそうです。そして、おそらく渡米後読んだであろう「独立宣言」には、「人民には政府を倒す権利が与えられている」とまで書かれています。

お上に従う人民、傍観者としての人民でなく、自立した市民の存在によって国家が成り立っている。このような風土がアメリカに、そしてヨーロッパにはありました。このように自立し成熟した国民を作りたいと、新島は考えたのではないのでしょうか。

「同志社大学設立の旨意」には「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず」、「智識あり、品行ある人民の力に拠らざるべからず」と書かれています。教育を通して「自治自立の人民」、「一国の良心」を作り出すことが彼の目的でした。

ご存じの通り、新島の言う自由、同志社の自由主義とは、好きなことをやってよいというような自由ではありません。責任を持って、主体的に物事を判断することができる自由です。自分たちの代表を選挙で選び、世の中の動向を注意深く見つめ、場合によっては政府を倒すこともできるような、成熟した、自立した人民の育成を、新島は願いました。しかし現

実は、世の中の動きに流され、批判的な思考力を持たない従順な国民が育ち、そのことが権力者にとっても都合がよいという状況になってしまっています。

平和教育の目的、主体的に「平和を作り出す者」になるとはどのようなことか。それは傍観者ではなく、一人ひとりが自立し、世の中の動向に鋭い感覚を持ち、「異常なことかどうか」を自ら判断し、行動を起こすことができる人物の育成に他ならないのではないのでしょうか。同志社の自由主義の上にこそ、真の「平和を作り出す者」が育つと信じてやみません。

2012年1月25日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録